

2021年度 第23回 愛恵エッセイ受賞作品集

# “豊かな福祉社会を創るために”

パンデミック(感染症)と私たち



公益財団法人

**愛恵福祉支援財団**

2021年度 第23回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集

# “豊かな福祉社会を創るために”

ーパンデミックと私たちー

公益財団法人

**愛恵福祉支援財団**

やあ こんにちは 奇遇ですね  
なぜこの日、この便に？  
ふむふむ、なるほどそうですか  
私？実はなんと、似た経緯です

なんでも時速1600キロで四方の空を見渡しながら  
一年かけてぐるりと太陽を観察し  
天の川銀河の波にゆったり乗りつつ  
時速216万キロで彼方の宇宙を目指す  
目白押しのツアーだとか

不安もすこし、ありましたが  
あなたと出会えてよかったです

いかがでしょう？お茶でも一杯

表紙・詩 土田 千恵

“豊かな福祉社会を創るために”  
～ パンデミックと私たち ～

ごあいさつ…………… 愛恵福祉支援財団 理事長 (4)

■ 学生の部

〔最優秀賞〕

・音楽と福祉のしあわせの形…………… 石橋 青 (6)

〔優秀賞〕

・歴史から学ぶ私達の福祉社会…………… 田渕 聖依 (10)

・コロナ禍で守るべきメンタルヘルス…………… パーンズ サラ (13)

・パンデミックが見せる福祉の壁…………… 石川 紗伶 (16)

〔佳作〕

・こころの距離は近づける…………… 村松 晴香 (19)

・いかにコロナ禍を乗り越えるか…………… 水本 園乃 (22)

・小さな思いやり…………… 小島 智美 (26)

〔奨励賞〕

・知る事から始めよう…………… 米島 夏綾 (29)

■ 専門職の部

〔最優秀賞〕

・「言葉の偽薬」と嘘…………… 大山 健一 (34)

〔優秀賞〕

・コロナ禍の自立・就労支援…………… 工藤 孝之 (37)

〔佳作〕

・パンデミックと私たち…………… 熊谷 真弓 (40)

■ 一般の部

〔最優秀賞〕

・私たちの使命…………… 小松崎有美 (44)

〔優秀賞〕

・障がいのある人との共生…………… 安藤 信男 (48)

・想像しよう…………… 感王寺美智子 (51)

・心は「密」に…………… 後藤 里奈 (55)

〔佳作〕

・コロナ禍だから自慢したい…………… 大友 浩 (58)

・「チャンとやる」…………… 古賀 裕一 (61)

・「ウイズコロナの行方」…………… 小柳 義則 (64)

〔奨励賞〕

・幸せを心に…………… 小原 マリナ (67)

※作品において用語が統一されていませんが原文を尊重しました。

あとがき…………… (70)

# ごあいさつ

公益財団法人 愛恵福祉支援財団

理事長 遠藤久江

新型コロナウイルスの感染が何度もピークを繰り返している状況下で、国民の命のセーフティ・ネットである医療機関が不足しているとのことです。コロナ対応が可能な病院、そこで働く医師、看護師などが不足しているのです。

加えて、地域医療の中核となるべく保健所も行政改革でその機能を縮小してきていたので、爆発的な感染症への対応ができず大きな混乱をきたしています。このような状況で多くの助かる命が失われ、家庭や職場も失なわれ、今も失われ続けています。

国家予算の30%以上の社会保障費は、誰もが平等でより良い環境で生活できるように計上されているものですが、それでも足りないのでしょうか、または医療制度がお粗末なのかもしれません。生産性向上ばかり目指した結論を見せられたのでしょうか。

出口の見えない「パンデミック」の中、恐怖と不安は拭えませんが、知恵と工夫と勇気をもって、みんな生きようとしています。

2021年度「愛恵エッセイ賞」はコロナの影響を受けている中にも、社会福祉の輪を広げるため応募者を募りました。

コロナによって気づかされている失いたくないもの、共生、交流。今を生きる工夫に意欲が沸き立たつ。新しい工夫を生み出す、職場のチーム力向上、お互いの存在感を確認しあう、東北大震災での喪失を共生、共働で再生した経験はコロナ後にも活かせるなど、コロナ禍は闇ではない、光を生み出す好機だとする作品が多く、励まされました。

ご応募ありがとうございました。

2022年3月

# 学生の部

---

---

## ■最優秀賞

音楽と福祉のしあわせの形 ..... 石橋 青

## ■優秀賞

歴史から学ぶ私達の福祉社会 ..... 田淵 聖依

コロナ禍で守るべきメンタルヘルス ..... バーンズ サラ

パンデミックが見せる福祉の壁 ..... 石川 紗伶

## ■佳作

こころの距離は近づける ..... 村松 晴香

いかにコロナ禍を乗り越えるか ..... 水本 園乃

小さな思いやり ..... 小島 智美

## ■奨励賞

知る事から始めよう ..... 米島 夏綾

## ■ 最優秀賞

# 音楽と福祉のしあわせの形

石橋 青

---

福祉のふの字も知らなかった。

音楽高校の音楽科を卒業してある有名音大を受験したものの1歩届かず浪人を決意した春、私は職探し（アルバイト探し）に必死だった。

耳にタコができてそろそろ血豆になりそうな例の"コロナ"で自営業の実家はそれとなくダメージを受け、浪人費用の1部を自分で賄わなければならなかったからだ。

ビル清掃やお菓子屋さん、塾、スーパー…と何軒も面接に伺ったが、流石の不景気にしがたい浪人生を雇ってくれるお店はなかった。

探せど甲斐はなく焦りがつもりに積もった頃、私は母から静かな驚きを持って祖父の近況を聞いた。

その頃膀胱がんから奇跡の回復を遂げた祖父が夜専（夜勤専門の介護職）として働いていると。御歳80。

なんちゅー胆力やおじいちゃん…。しかも夜勤！介護なんてハードな仕事なはずなのに…！と感嘆を禁じえなかったわけだが、そうか！介護ならお仕事あるかも！と閃いた次の瞬間、介護職員初任者研修を申し込んでいた。

ちょうどその頃、咽頭に病気が発覚し本当にこの道を進んでも良いものか、歌は本当に好きだがもっと輝ける別の道もあるのではないかと葛藤していたこともあり介護の勉強には熱が入った。

そこで初めて福祉が様々な人の幸せを考える分野だということ

知った。

私のいた業界（音楽）も音楽でいかに社会を幸せに出来るかという場所だったことから馴染みのある雰囲気だった。

福祉＝車椅子、障がい者といったようなお粗末な知識しか持ち合わせていなかった私に初任者で習う介護や福祉の世界のことは目から鱗の連続だった。中でも講師の先生が1番初めと最後に仰った「私たちは介護を必要とする人たちの最後の砦です。それを忘れないで」という言葉には何だか胸が熱くなった。

15日の濃い研修の後、私は地元の有料老人ホームで非常勤の介護職として雇って頂けることになった。本当にありがたかった。

初めの2ヶ月はガチガチだったと思う。

それに引き換えなんとベテランの先輩の対応の柔軟なことか！認知症や重い障がいでもコミュニケーションにどんな壁があったとしてもそれを乗り越えて意思疎通を図る、共感する、信頼関係を築く。

そんなバリアフリーを地で行くようなコミュニケーション能力を目の当たりにしてああ…これが介護職の専門性だあ…と感動したのだが、その域にはまだまだ遠い。

入社したのが10月だったが、あっという間に3ヶ月の試用期間が終わろうとした頃、クリスマス会担当の先輩に「今度クリスマス会で歌ってくれない？」と声をかけて頂いた。

面接の時に声楽科の学生であること、今年は浪人生として勉強していることを伝えたところ、ホーム長に思いのほか喜んで頂けて嬉しかった。

という経緯があり、やはりコロナ禍で演奏の機会が少ないこともあったので快諾させて頂いた。日頃の感謝も伝えたかったので良い機会だった。



といっても感染症対策の関係で伴奏者を呼ぶことは出来なかった  
のでピアノでアメイジング・グレイスを弾いて、その後施設にある  
カラオケで浜千鳥を歌わせてもらう…という本当にささやかなプロ  
グラムだったのだが。

ピアノを弾き終わると私の横で聞いていらした利用者さんの目か  
ら涙が零れた。寄り添ったホーム長に嬉しくて…と眩かれた微かな  
声を捉えた私は頬を緩めた。

歌い終わると普段険しい表情でいらっしゃる方が笑顔でいらっ  
しゃるのが目に入った。

今まで頂いたことの無いような割れんばかりの拍手（入居者さん  
のどこにそんな筋力が！）とアンコールを入居者さんから頂き、人  
生で1番褒められたんじゃないかというような賛辞を先輩方から何  
日も頂いた。

パンデミックと浪人という厳しい状況の中において音楽をする意  
味を見失いかけていた私に、それを必要として下さる方がいらっ  
しゃることを、そして私も音楽に救われていることを気がつかせて  
くれた出来事だった。

そして何より、このパンデミックで感染対策のために人と人の交  
わりに防護壁を築くことがある種当たり前になりつつあることで、  
どこか心と心の間にも壁が出来てしまいそうな。

そんな中にあっても音楽が多くの人々の心を繋いで温もりの輪とし  
たことに私は感動した。その力を目の当たりにすることが出来たこ  
とでティーン最後のクリスマスを職場に捧げて本当に良かったと心  
から思った。

どうだろうか。

今、福祉の現場に音楽レクは充実しているだろうか…音楽や美術、

芸術は生かされているだろうか。

音楽や美術の人と人を繋ぐ力は、いつかより良い福祉の形をこの社会が実現するための手段になれると考える。

聞くところによるとドイツでは介護予防に介護保険でピアノ等楽器を習えるプログラムが人気だそうだ。

私は創作と表現の力が社会全体を更により良いしあわせの姿に導いていけると信じている。私もいつかはそういう社会のために尽力していきたい。

## ■ 優秀賞

# 歴史から学ぶ私達の福祉社会

田 淵 聖 依

---

昨年は、私の生活の中で社会福祉を身近に感じる事がとても多い一年でした。その要因として、世界中がパンデミックの脅威にさらされ、社会経済活動に大きな打撃を受けたことが挙げられます。そして、私達の生活を守るために社会福祉が大きな役割を担い、コロナ禍で著しく生活が変わる中、私達に寄り添ってくれた年でした。社会を担う福祉制度は、児童、母子、障がいのある方、高齢者など社会生活を送るうえでハンディキャップを負った人々に公的な支援を行う社会保障制度の中で、私達の暮らしは支えられています。私自身もコロナ禍で、社会福祉制度に助けられてきました。その中で私達の生活は、コロナウイルスにより学校や社会コミュニティが閉鎖され、私の生活も孤立化されていきました。様々な学校行事もなくなり、授業すらまともに受けられない状態でしたが、私達の年齢もコロナワクチンを接種することができるようになりました。

「これでまた、学校が明るくなる！」と期待し、感染者を増やさぬ努力と自らも命を守るために進んで接種をしました。ところが、思いもよらぬ方向へ事態は急変します。私は、コロナワクチンによるアナフィラキシーを起こし、呼吸困難と痙攣により救急搬送されました。夜中に救急車の要請をしてから病院に着くまでの時間がとても長く感じられ、母の声が遠くに聞こえて不安と息苦しさを私はパニック状態でした。病院へ搬送された後、治療を終え、担当医から私の容体が安定したことを聞いた母は、安堵とともにいかに日本

の社会保障制度が豊かであるかを身に染みて実感したと言いました。なぜなら、コロナ禍で嚴重な体制の中、いち早く病院へ搬送してもらえたことや医療スタッフの皆さんの看護を受け快復できたこと、私の住む市では、十五歳まで医療費が無料で受診ができるなど様々な分野により私達は、多種多様な職種の人々によって支えられてた社会保障制度を受けることができるからです。そして母は、私の治療を待つ間に病院で亡くなったコロナ患者さんの家族をお見かけしたことも教えてくれました。そこで私に「こうやって助かった命は、一人で生きている訳じゃない。たくさんの方々の助けがあったことを忘れてはならないね。」と話し、それをきっかけに私は、社会福祉が整っていなかった時代にウイルスや感染症と闘ってきた先人方の暮らしを知りたいと思い、母に相談すると自宅から車で1時間ほどの場所へ連れて行ってもらいました。

そこは、岡山県にある長島愛生園というハンセン病の歴史資料館で、当時の遺構なども見ることができました。その時、私はハンセン病について何も知らず、資料館で見た展示物から数十年前に社会から消されたパンデミックがあったことを知り、衝撃を受けました。幼い子ども達から様々な年齢のハンセン病に罹った方が家族や社会から断裂され、国の隔離政策に従い、この地へ連れてこられました。家からハンセン病が出たと世間に知られることを恐れ、改名せざるを得ない方もいたそうです。家族に宛てた手紙には、「もう連絡はしてこないで。」と書かれた返信にやり場のない寂しさや悔しさが綴られた書物もありました。この地から逃げようとする者を閉じ込めるための独居房やこの園に着いてすぐ、服のまま浸けられた消毒槽を見て、この日本で今よりももっとパンデミックを恐れ、間違った情報で差別をされてきた人々がいたことを知りました。

それは、もはや人権などにはほど遠く、二千年以上前の書物である聖書や日本書紀にもハンセン病の記述があり、人間の歴史上には、このようにずっと様々な形に変え、感染症と生きてきた証拠が残っています。私は、収容所などの遺構を見て感染症を考えることは、人のあり方を考えることではないかと考えました。

社会福祉に生かされながら一方では、その制度を知らず、格差が生まれていることや人々の無関心という差別から苦しむ人を見ぬふりをする社会では、本当の豊かさには繋がりません。当時、日本で行われた「無らい県運動」により誤った認識を社会において植え付けられ、官民一体となって感染者を隔離し続けた政策は、根強い偏見差別を残し、平成21年にハンセン病問題基本法が施行されるまで、これほどの社会保障制度が整った国でありながら取り残された世界があったとは、現代の情報化社会の中で、あやふやな情報に振り回されず、正しい情報を知識として得る力を見いださなければならぬと感じました。そして、現代社会に生きる者の義務として自らが助け人となれるよう愛という心の手をとなりの人へ繋いでいかなければなりません。それは、思いやりという形に変わり、社会を考えていく力になると信じ、先人方が遺されたハンセン病の歴史の上に私達は、コロナ禍において感染症と共存してきた証しを伝え続けなければなりません。次世代を担う私達は、豊かな社会福祉を継続するためにさらに学び続けていこうと思います。

## ■ 優秀賞

# コロナ禍で守るべきメンタルヘルス

バーンズ サラ

---

新型コロナウイルスの蔓延によりすっかり景色が変わってしまったこの世の中で、いま私たちはたくさんの不安を抱えています。実際に罹患して亡くなってしまった人も数多く、その家族や友人も大きな心の傷を負いました。また感染していない人も、“いつ感染するか、させるかわからない”、“もし感染したら他人から批判や差別を受けるかもしれない”、という不安に常に怯えています。日本でも外出の自粛が呼びかけられ、自由な生活が制限される窮屈な世の中で、会いたい人に会えない、人との距離をとらなければいけないということにストレスを感じる人も少なくありません。その他にも、コロナ禍で、仕事や職場でのストレス、勉強や進学についてや家族や対人関係への不安など、精神的な悩みを抱える人が増えているのが現状です。私は、現在学校で心理学を学びながらカウンセリングの勉強をする中で、このパンデミックが人々のメンタルヘルスに与える影響や、これから私たちはどのように心の健康を守っていくべきかについて考えていきたいと思います。

日本でも、“コロナうつ”と言う言葉が生まれてしまうほど、新型コロナウイルスの影響で心に病を抱える人が増えています。残念ながら自殺に追い込まれてしまった人の数も、コロナ禍以前より増えてしまいました。自殺に至らないまでも、“本来の自分はずっと幸せだったのにコロナ禍で変わってしまった、こんなはずではなかったのに”、と心を閉ざしてしまった人も少なくないはずです。心がうつ

状態になる原因には、ストレスや不安、環境の変化などによる心的ダメージが大きく関わっていますが、同じ状況におかれてもストレスや不安を感じる度合いは人それぞれです。では、ストレスによる心のダメージを減らすために、私たちにできることは何でしょうか。自身にとってストレスになるかどうかは、その出来事や環境をどのように受け止めているかに左右されます。どのようなことも柔軟にそして肯定的に捉えることができれば脳や心に良いストレスとなりますが、否定的に捉え暗い気持ちになると悪いストレスとなり、それが蓄積され脳で作用する神経の伝達物質の働きが悪くなることでメンタルヘルスに悪影響を及ぼします。また、“感染したらどうしよう”という、まだ起きていないことへの予期不安を常に抱いていると、神経交互作用がマイナスの方向に働き、不安が不安を呼ぶという負のスパイラルに陥ってしまいます。パンデミックは決して自分でコントロールできるものではありません。コントロールできないものに執着するのではなく、物事を肯定的、客観的に見つめ直して、今自分ができるとは何か、ということに注視するほうが気持ちに余裕が生まれるのではないのでしょうか。

また、テレワークやオンライン授業など、コロナ禍の新しい習慣になかなか順応できず、上手くいかない状況に腹が立ったりイライラする、という怒りの感情に悩んでいる人も多いと思います。私が学んだ心理トレーニングに“アンガーマネジメント”がありますが、これは、怒りも大切な感情の一つと捉えつつ、自身の怒りの仕組みを理解することで、怒る時には上手に怒り、不必要なことには怒らないようになるという考え方です。人は誰しも、“～であるべき”という自分の理想や価値観を持っていますが、マイナスな状態が生まれることでその“べき”が裏切られ、それがストレスや不満に繋

がり怒りのスイッチが入ってしまいます。そんなときは一歩立ち止まって、自分の持っている”べき“が自分や周りにとって心身ともにプラスに働くものなのかということを見直したり、時にはハドルを下げて心に余裕を作る工夫も必要だと思います。そうすることで、自分の怒りを客観的に見つめ直し、怒りの感情と上手に付き合えるようになるはずです。

そして、世界中で見えない敵と戦っている今、私たちの心の健康のために最も必要なのは、“人と人との繋がり”や“寄り添い”です。悩みを一人で抱え込まず、気持ちを開示する場所や機会を見つけることが何より大切です。物理的に離れていても、ソーシャルメディアの普及により気持ちや意思、情報などを共有できる世の中にもなりました。また、ステイホームの習慣を、家族と絆を深める機会だとプラスに考え積極的にコミュニケーションをとることで心の不安の解消に繋がることもあるはずです。

私たちは決して一人ではありません。悩みや不安は誰もが抱えています。世界が劇的に変化した今、以前の生活にしがみついて不幸せを嘆き悲しむか、ニューノーマルと言われる新しい日常の中で前向きに価値を見出だして幸せを感じるかは、私たちの心持ち次第です。今は出口の見えないトンネルにいるかもしれませんが、出口は必ずあると信じて皆で前を向いていけたら、その先には必ず明るい“ポストコロナ”の未来が待っていると自負しています。



## ■ 優秀賞

# パンデミックが見せる福祉の壁

石川 紗伶

---

私が「福祉社会」という言葉を耳にしてまっさきに思い浮かべるのは障がい者の存在だ。そこには私の叔父が障がい者であることが大きく関係している。叔父の持つ障がいは身体的なものではないため外見では判断しづらく、私も幼い頃は気付かなかった。しかし成長するにつれて叔父が不安定になっているところを何度か目にするようになり、私にとって障がい、特に精神的なものや知的に関するものが「恐怖」を感じる対象となってしまった。登下校で利用する電車に乗っている障がい者の方々に対しても意味なく嫌悪感を抱いてしまったり無意識に避けてしまうことが度々あった。

しかし小学生の時に障がい者施設を訪問し障がい者の方々とお話する機会があり、私のそれまで持っていた彼らに対する勝手なイメージや偏見は根本から覆された。私はそれまで「障がい者」と彼らを一括にして捉え、極端に言えば彼らに違いなどないと思っていたしそれに気づく努力すらしてこなかった。ところが、そこでお話しした方々はどなたもとても好意的で、また個性に溢れていた。「十人十色」という言葉を体現するかのように好きな色や食べ物はもちろんのこと物事の捉え方や考え方までもが全く異なり、私は無知を知らないことの愚かさを初めて痛感したと同時に、相手のことを知ろうと歩み寄ることもせずに固定概念や偏見にとらわれながら過ごすことがどれほどその人の視野を狭くし彼らを共生社会から遠ざけているのかを実感した。

障がい者といった弱い立場にいる人とそうでない人を隔てている最も強固な壁は社会の制度や仕組みなどではなく私達一人ひとりの考え方なのではないか、そう強く思った。そして2019年12月、新型コロナウイルスという未知の敵に立ち向かうことを強いられた時、私は小学生の時に感じたあのモヤモヤを再び感じる事となった。

それは世界中でアジア人や医療従事者が差別を受け、また多くの人々が自らの利益のみを追求し買い占めやそれに伴う争いが起きていることを様々なメディアを通して知ったことがきっかけだ。普段、生活をしていて気付きづらい福祉の壁の本質が新型コロナウイルスを通して明確になった気がした。そう、福祉の壁、福祉社会実現に向け不可欠なもの、それはお互いを尊重し受け入れ合う気持ちだ。どんなに制度や仕組みが整おうとも一人ひとりが理解を示さなければ福祉社会は実現しないのだ。

しかしここで注意しなければならないのは、相手を尊重することと同情することは全くの別物であるということだ。私達健常者は度々、障がい者に対して「仕方がない」というように譲る形で、あたかも自分達が優位に立っているかのように考えてしまうことがある。しかし本来、尊重し合うというのは妥協点を見つけ許容し合うことではなく、妥協点だと思われる部分までもを個性と捉え、真に理解することなのではないだろうか。実際に私も施設を訪問した際に「障がい者にとって最も嬉しいことは制度の拡充ではなく多くの人が理解を示してくれることだ」と言われ、その言葉は今でも心に深く残っている。また尊重し認め合うためにもまずは相手を知ることが不可欠になるが「知る」と言っても、彼らの障がいの内容などを今いる立場から表面的に捉えていては彼らを知ったことには決し

てならない。そこで満足している状態が先程述べた無知であることを知らない状態なのである。そして無知であることを知らないがために起こってしまった事件の一つが相模原障がい者施設殺傷事件なのだ。犯人である植松聖は「意思疎通のできない重度の障がい者は不幸かつ社会に不要な存在であるため、重度障がい者を安楽死させれば世界平和につながる」とあまりにも身勝手である動機を述べており、これこそ相手の立場に立つこともせず自らの常識や固定概念を一方的に押し付けた行為の結果である。

真に「知る」というのは、自らの考える常識から一旦抜け出し相手の立場になって内側から彼らの置かれる状況を類推し理解することだと私は思う。そして多くの人々がそれを実践できた時に初めて真の福祉社会や共生社会、ひいては世界平和が実現するのではないだろうか。

今も尚、コロナウイルスによって多くの人々が不安を抱え、また多くの人々の負の感情や対立、争いが世界を渦巻く中で私はそれを打破する一筋の光を見つけたように感じる。それは決してコロナウイルスのみに通ずるものではなく、それが現れるずっと前から私達人類が抱えている「福祉社会実現」という一つの課題にも通ずるものではないだろうか。少し怖く思っていた叔父だったが、自らの固定概念を捨てて話したことで叔父のいる世界を知ることができ、それが私達のいる世界と何ら変わらないことに気付くことが出来た。そして無知を知らないところから無知くらいにはなれたのではないだろうか。皆さんにもまずは「知る」ことから始めてほしい。そして福祉社会実現への舵を切ろうではないか。

## ■ 佳作

# こころの距離は近づける

村松晴香

---

「あなたの笑顔が素敵なことは、見えなくても分かるわよ」  
そう言って私の手を握った利用者さんは、目を細めてにっこりと微笑んだ。

2021年夏、コロナウイルスが猛威を振るう中、私は高齢者が生活を営む特別養護老人ホームで実習を行うことになった。コロナウイルス感染拡大の影響で、実習先が決まったのは実習開始の3日程前だった。正直に言うと「なんだか嫌な時期に実習することになっちゃったな」という気持ちがほとんどで、私の心はどんよりとした曇り模様で埋め尽くされていた。

これまで、私は高齢者とまともに関わることもない人生を歩んでいた。講義では高齢者や認知症など様々なことを学んでいたが、実生活では自分の祖父母とたまに会って話すくらいで、身内以外の高齢者と関わることはほぼ皆無だった。高齢者と関わった経験がないということは、実習をとっても憂鬱に感じる理由の1つでもあったが、それ以上に、コロナウイルスを施設内に持ち込む危険性や、マスクで表情の見えない環境下を考えると、ズーンと重い気持ちになった。また、人と人との物理的な距離が悪くなるこの時期に、素性のよく分からない学生が来ることは、利用者さんにとって嬉しいのだろうか、とも疑問に思っていた。そして、「ソーシャルディスタンス」を守り物理的な距離を保つことは、相手をもものすごく遠くを感じるような気がして、利用者さんに関わる事すら不安だった。

「はい、それでは学生さんに挨拶してもらいましょう。」

実習初日、私は認知症の利用者さんが少ないフロアへ配属となった。祖父母くらいの年齢かそれ以上の利用者さんたちが、私の顔をじっと見ていた。震える声を抑え、すべての利用者さんの耳に届きますようにと祈りながらあいさつをした。パラパラと拍手の音が聞こえて、少し安堵したのを憶えている。マスクをした私の顔は、利用者さんにどのように映っているのだろう。マスク1枚あるだけで、利用者さんたちとの間に壁があるような、不思議な感覚に陥った。マスクをしていて、顔の分からない私のことを利用者さんは受け入れてくれるのかな。そんなことをうっすら考えて、更に緊張して心臓が波打っていた。

「あなた、緊張しているでしょう。」

どきり、とした。その利用者さんは、私の目をじっと見て"ここに座りなさい"とでも言うように目の前の椅子を指差した。私はそのジェスチャーに導かれるようにそこに座り、「なんで分かったんですか?」と利用者さんの目を見ながら尋ねた。「私はね、なんでも分かるの」と言った利用者さんの目は、三日月の形をしていた。実習期間中、私はその利用者さんと色々なことを話して、色々なことを教えてもらった。

実習中は、マスクで顔の見えない現在だからこそ、目を意識的に動かしてコミュニケーションをとるように心がけていた。悲しい時は眉と目を下げて、楽しい時は目を三日月の形にする。そのことを意識して、相手に感情を伝えるよう努めていた。すると、徐々にマスク1枚の壁を壊しているような気持ちになった。人と人との距離が少し近くなったような、そんな不思議な感覚だった。私はその時、  
“物理的な距離を保つ必要があっても、心の距離を保つ必要はない”

ということを実感した。そうか、今まで私が壁だと感じていたものは、物理的な距離だけじゃなくて、心の距離でもあったんだ。マスクだったり、ソーシャルディスタンスを強く考えるあまり、無意識のうちに心の距離も遠くなってしまっていたことに気づいた。

「あなたと話すとき楽しいわ」「もう緊張してないわね」

そんなふうに言ってもらえるようになったころ、実習は最終日を迎えた。「今日で最終日なんです。沢山ありがとうございました。」と利用者さんに伝えると、利用者さんは私の手を握って「あなたの笑顔、素敵だったわよ」と言ってくれた。「マスクで見えてないじゃないですか」なんて笑いながら言うと、「見えなくても分かるのよ」と利用者さんは目を細めた。私はその時、利用者さんとの間にあった様々な壁が崩れたような清々しい感覚になり、胸がいっぱいになった。

パンデミックは、「ソーシャルディスタンス」を常にする社会を作り上げた。学校や職場など、さまざまな場所で人と人の距離を保つように指示され、孤独を感じた人も多いただろう。確かに、物理的な距離が遠くなることは、マイナスな面もあるかもしれない。しかし私は、物理的な距離が離れてしまっても、心の距離は近づくことができると感じている。ソーシャルディスタンスやマスクという壁は、少しの意識で透明に、もしくは無くすことができると思う。物理的な距離を保っても、心の距離は近づけるのである。そのようなことに気づけたのは、パンデミック禍での実習だったからであり、そのことに気付かせてくれた利用者さんとの出会いは、一生の宝物だと感じている。

## ■ 佳作

# いかにコロナ禍を乗りきるか

水本園乃

---

ここでひとつ考えて頂きたいことがある。もし、道端で明らかに貴方へ助けを求めている人がいたら、その人を助けるだろうか？恐らく答えはYESだろう。

では、もしその人がノーマスクで、しかも咳込んでいたらどうだろう。助けるのを躊躇いはしないだろうか。

このようにコロナ禍は手助けをするハードルを上げてしまった。人を助ける前に、自らの安全を確保する必要があるからだ。

そんなコロナ禍で、福祉を取り巻く状況はどう変化したのだろうか。

障がいや病気などにより生活に介助が必要な人を家族だけで支えるのは負担が大きいことであり、そんな人々を支援するのも福祉の大切な側面である。支援には第三者による密接な接触が不可欠だが、支援を受ける人々は一定数、年齢や、病気・障がいの特性でマスクの着用やワクチンの接種が出来ない。つまりリスクが高いと言わざるを得ないのだ。それを忌避して離職が増えたこと、それに加えて海外からの技能実習生が来られないこともあり、福祉に関わる人手不足はさらに深刻になっている。

また、聴覚障がいのある人々にもコロナは大きな影響をもたらした。口や舌を触っての発音確認が出来ないため、口話の習得に困難が生じているのだ。感染拡大後、十分な口話教育を受けられていない子供達の将来への影響が懸念されている。また、読唇術によるコ

コミュニケーションが取れず、情報が得られなかったり孤立したりしてしまう人もいる。聴覚障がい者にとって便利な透明マスクは、当事者だけではなく周りの人々も使うことが求められるため、普及に課題があるように思う。

そして、作業所の収益も減少している。イベントが減少したり、仕事の単価が落ちたためだ。これは人と福祉との関わりが減ったこと、そして福祉事業にかけられるお金が減ったことを意味している。福祉事業の縮小は、就労できた障がい者の雇用も脅かした。障がい者の解雇または新規雇用の停止が増加しているのだ。

自立のために就労を大きな目標にし、社会と繋がることの出来る生きがいとして仕事を楽しんでいた彼らにとって、このような状況は非常に厳しいと言わざるを得ない。

このようにコロナの感染拡大は福祉に関わる人々にとって大きな負担となり、人手不足を悪化させた。また、障がい者にとって必要な支援が受けにくくなり、彼らの生きがいも奪われてしまった。それは生きづらさに直結するだろう。

では、これらの困難を乗り越え、豊かな福祉を実現するには一体どうすれば良いのだろうか。私は2つのことが大切だと考えた。

まず、施設の受け入れ制限や福祉サービスの縮小により介助の負担が大きくなった家族や、コロナ対策により忙しさが増した福祉の現場で働く人々のサポートが必要だ。補助金などの経済的な支援や、傾聴ボランティアなどの心理的な支援まで幅広い支援が求められていると思う。そして、リスクの高い中福祉に関わっている人々が万が一感染した際に、差別を受けないようにすることも大切だと考えた。

次に、どんな人も最善の医療が受けられる仕組みを作ることが必



要であると思う。

例えば、治療に専門性が必要で、時に治療に協力的でない精神疾患を患っているコロナ患者を受け入れる病院はそう多くない。そんな中、東京都立松沢病院は、他の精神病院からも患者を受け入れているということをNHKのドキュメンタリーで知った。様々な困難を乗り越えながら、医療の最前線で治療に当たっている姿を実際に見たことで、日々提供されていた医療は当たり前ではなかったことに改めて気付かされた。「いつでも」「誰でも」医療が受けられることを目的とした国民皆保険制度があるこの日本において、松沢病院のような取り組みが広がっていくことが強く求められていると思う。

また、作業所の看護師や医師のことも触れておきたい。障がいの特性から一般の病院での受診が難しい障がい者は、彼らの健康状態を日々把握している作業所の医療従事者達が診察を行っている。作業所では特性に配慮した診察が受けられ、患者も日々通っている作業所なら安心して治療を受けることが出来るのだ。

また、呼吸器が弱かったり、免疫機能が弱かったりとリスクが大きい子供たちも多くいる、特別支援学校などに配属される学校看護師もコロナ禍の障がい児にとって大切な役割を担っている。

しかし、認知度の低さ、病院勤務に比べた待遇の低さから人手不足が慢性化しており、早急な対策が求められている。

有史以来、人類はペストや天然痘など様々な未知の感染症のパンデミックを経験してきた。しかし福祉の概念があまりなかったその時代、障がい者の存在が表沙汰にされることも少なかっただろう。つまり今回のパンデミックで初めて、非常事態における福祉を取り巻く状況の弱さや対応の難しさが鮮明に出たと言える。

人々の意識改革、そしてそれを支える枠組み作りが進められることを願っている。

## 小さな思いやり

小島智美

---

新型コロナウイルスの感染が拡大し、気づけば2年が経った。今まで当たり前のようにできていた行動も制限され、思うように生活ができず、苦しんでいる人は多いと思う。しかし、このような状況の中で、さらに社会的に弱い立場にある人がいることを忘れてはいないだろうか。自らも手一杯の状態で他人のことを考えるのは難しいだろうが、障がいを持つ人やその家族もまた奮闘しているのだということも覚えておいてほしい。

私は小学生の頃から、障がいのある人々や彼らに向けた福祉活動について興味を持っており、現在もインターネットなどを使ってその生活や実態を調べている。その中で、コロナ禍に陥り自由が制限されるせいで、今までよりさらに苦勞しながら生活を送っている人々がたくさんいるということに気がついた。

例えば自閉症や ADHD などといった発達障がいのある子供たちにとって、いつも行っていた場所に急に行けなくなったり、いつも食べていたものが食べられなくなったりすることは、彼ら自身のルーティンを崩すこととなり、強い不安やストレスとなってしまうことも少なくない。マスクの着用義務も、感覚過敏を持つ人々にとっては苦痛でしかないだろう。さらに、外出自粛が求められるため、気晴らしに公園で遊んだりどこかへ遠征したりすることも難しく、溜まったストレスを発散することも容易とは言い難い。

また、このような子供を育てている保護者にとっても、普段利用

しているデイサービスや福祉センターといった福祉サービスの活動が制限されることは、今までの頼り先を失うことであり、さらにそれによって自分一人の時間を失うこととなるため、更なる負担がかかってしまっていると言えるのではないだろうか。

他にも、身体的な障がいを持つ人の中には基礎疾患を持つため、人一倍気を配って外出しなければならない人がいたり、聴覚障がいを持つ人はマスクをしているため口の動きが見えず、会話がスムーズにできなかつたりと、常に煩いながら生活しているのである。このような人々に私たちは何が出来るのかと考えたとき、真っ先に思いついたことは「思いやりを持つこと」であった。至って単純なことであり、言葉にすると簡単そうに聞こえるが、実際何か行動に起こすのはとても難しいことである。ましてコロナ禍ともなれば、自分の家族の生活を考えるだけで精一杯で、他人のことを考えるなどもっての外だろう。しかし、このような状況下だからこそ手を取り合い、協力することが重要なのである。私たちが人との繋がりを求めているように、障がいを持つ人々やその家族もまた、誰かからの優しさを求めている。コロナウイルスが未知であったのと同様に、「障がい」もまた未知であるため、嫌悪感や恐怖を抱くかもしれないが、未知と向き合い、理解した上で働きかけてこそ、より良い未来が実現されると思う。必ずしもボランティア活動へ参加したり、手話を覚えたりといった具体的な行動をとらなくてもいい。ただその「未知」を理解し、「未知」に関わろうという意識こそが当事者たちへの一番の思いやりであり、社会をより豊かにする根源なのではないか。

また、これは障がいの有無に限ったことではない。新型コロナウイルスが蔓延し、なんの障がいも持っていなくても支援を必要とす

る人たちがたくさんいる。人間は自分たちが思っているよりはるかに弱く、しかし一方で、たった数文字の言葉に救われることがある。私自身、コロナ禍でうまくコミュニケーションが取れず、思い悩んだことがあったが、話を聞き、共感してもらえただけで一気に気持ちが軽くなった。こんな今だからこそ、私たちは他人に寄り添い、協力して未来を明るくしていこうという心構えがより一層求められているのである。

日本は他の先進国と比べ、福祉制度にまだまだ課題が残されている。このような思いやりの精神が日本全国で普及し、福祉活動やサービスに興味を持つ人が増えれば、障がい者をはじめ、一人親家庭や相対的貧困層へ向けた福祉制度にも関心が持たれ、より豊かになっていくのではないか。思いやりはどんなに小さなことでもいい。小さな思いやりが積み、やがて社会福祉を大きく変えるのだ。まずはその第一歩として、街中で困っている人がいたら声を掛ける、電車などで障がいのある人を見かけても一方的に拒絶しないといった基本的な行動から見つめ直してみてもはどうだろうか。

## 知る事から始めよう

米島夏綾

---

私は生まれた時からアトピー性皮膚炎がひどく、手や体に毎日薬を塗らないとすぐに血が出てしまう。特に右手の小指は曲げられない程ひどい。友達からはよく、えん筆やおはしの持ち方が変だよ、と言われるがアトピーの事を説明すると皆理解してくれる。しかし、お母さんは違った。私のお母さんは生まれた時から左手を思う様に動かせない障がいを持っている。学生時代には私と同じで皆に左手について説明したが、いじめに合い転校しなければいけなくなったり、大人になってからも限られた仕事しか任せてもらえなかったりと大変な思いをたくさんしてきた。それでも、お母さんはいつも笑っている。その笑顔は私と何も変わらない。

ある日、学校で目が見えない人や、耳が聞こえない人達がどのような日常を送っているのかを体験する授業があった。その授業を受けるまで白杖なんて知らなかったし、障がいのある人達が歩いたり、人と会話を成立させる事ですらすごく大変なのだと知らなかった。曲がらない小指を気にしていた私の日常生活がそれだけ幸せなのか気付かされた。そして、お母さんの日常はどのようなだろうと考えた。家に帰って、次の日の準備をする時に右手だけ使って教科書の出し入れやえん筆をけずってみたが、すぐに左手も使ってしまった。お母さんはこんな毎日を送っていたのか。今まで気にしなかった自分が恥ずかしかった。そこで、私はお母さんの左手のお手伝いをしようと思った。お母さんの代わりに晩ご飯の用意でお皿を並べたり、

荷物を持つなど毎日私がお母さんの左手になるつもりでお手伝いを頑張った。最初は喜んでくれたお母さんだったが、段々と困っている様な顔になっていった。ついには、そんなに無理をしなくても大丈夫だから、とお手伝いを断られてしまった。私は悪い事をしていないのにどうしてなのかわからなくなってしまった。

その日の夜、お父さんに今までの出来事を話してみた。私の家ではお父さんが主夫として全ての家事をしている。そのため、お父さんならば何をしたらお母さんのお手伝いになるか知っていると考えたのだ。優しく微笑んだお父さんの口から出てきた言葉は、私の予想していたものとは全くちがっていた。

「お母さんの左手を特別あつかいしないで、お父さんの左手と同じ様に接してほしい。お母さんは左手を使わないとどんどん固くなって今よりも動かなくなっちゃうからね。お父さん達にできる最大のお手伝いは、毎日リハビリの機会を作る事だよ。」

この時、私は何と返事をしたのか覚えていない。ただただ、私は何も知らなかったのだと思い知らされた。

お母さんの様に生まれた時から障がいのある人もいれば、病気やケガで障がいを負ってしまった人もいると思う。手が動かない人、足が動かない人など一人一人がかかえてる問題は違う。それなのに、今自分は健康だからと何も考えないまま生活していたのは、きっと私だけではないだろう。自分が何らかの障がいを負えば、どの様に生活していくか真剣に考えるはずだ。明日も健康でいられるとは限らない。今からでも自分が住んでいる地域に障がいのある人が安心して利用できるお店はあるか、段差の少ない道路や交通手段を調べる事はできると思う。それは自分のためだけではなく、困っている人を助ける時にも役立つにちがいない。

あなたは障がいのある人の大変さをどれだけ知っているだろうか。そして、自分がどれだけ知らなかったか知っているだろうか。障がいを持つ人の助けになりたい、その答えは解答者の数だけあると思う。豊かな福祉社会を創るためには、まず知る事から始めよう。そうすれば、思いやりにあふれた素敵な世界になると私は信じている。

晩ご飯の用意をしている時に、私はお母さんの左手に皆の分のおはしをわたした。私の行動を理解したお母さんは、お箸を並べると左手で私の頭をなでてくれた。料理中のお父さんと目が合う。

「これもリハビリ。」

私は、昨日までの私よりもお母さんの心に寄り添えたと思う。





# 専門職の部

---

---

## ■最優秀賞

「言葉の偽薬」と嘘 ..... 大山 健一

## ■佳作

コロナ禍の自立・就労支援 ..... 工藤 孝之

パンデミックと私たち ..... 熊谷 真弓

## ■ 最優秀賞

# 「言葉の偽薬」と嘘

大山健一

---

「嘘をついてもいい」が是か非かと言われれば非だが、現実には人は「嘘」をつく。なぜならば、人はそのような存在だからである。

「これから散歩に行きましょう」

「そうだねえ」

私の勤務する有料老人ホームでのケアスタッフと利用者との何気ない日常の会話である。

スタッフの声掛けにこころよく応じ、笑顔で一緒に歩き出す A さん。その彼女の足は途中でピタリと止まり、フロアに響く大きな悲鳴が上がった。

「何をするの、私はお風呂なんて入らないわよ。」

そう言って浴室の前で大声で悲鳴を上げながら彼女は怒り出した。その姿を冷静に見つめるスタッフ。手を振り上げ暴れる A さん。

実は、彼女は普段から介助拒否のある利用者だったのだ。

入浴に案内しようにも普通に声をかけても「いい」とそっけなく断られるのはいつものことだ。この日も入浴拒否があるだろうと予想したスタッフは「散歩」を口実にして浴室にまで連れ出して、そのまま入浴させようとしていたのだ。

しかし、浴室の前まで来て異変に気付いた彼女がスタッフを前にして暴れ出したのだ。

最終的には、二人がかりで浴室に連れていかれて、否応なしに入浴させられることになった。湯船につかるまでは「何をするのよ」など

の悲鳴と罵声が浴室から繰り返し響いていた。

少し経つと大声はしなくなった。

浴室から出てくるときにはニコニコと笑顔になってはいたが、私の心の中には一つの疑問が渦巻いていた。高齢者にとって生活の場であるはずの介護現場では、この A さんの場合がそうであるように、認知症の人に対して当たり前のようにその場しのぎの「嘘」をつくことがある。

あるスタッフは「こうでもしなければ入ってくれない。」と語る。しかし、本当に嘘をつくことが正しい介護のあり方なのかと疑問だけが残る。

あるいは、帰宅願望のある利用者に対しても当たり前のように、「明日帰れますよ。」「明日ご家族が来ますよ。」など声かけを日々している現実がある。しかし、その利用者は翌日自宅には帰れないし、ご家族が来ることもない。つまり、声かけしているスタッフに悪意があるわけではないが、明らかに利用者に対して「嘘」をついていることになる。A さんのケースもこのようなケースも私は利用者の人権をないがしろにしたものではないかと考えている。

ある日、私は認知症介護実践者研修に参加することになった。そこで、講師の先生から次のように教えてもらった。

それは、「認知症の方であっても嘘をついたり、ごまかしたりすることは間違っている。きちんと事実を説明していくことが大切だ」ということである。

帰宅願望のある利用者に対して、自宅に帰ることはできないのに「明日帰れますよ。」などと説明するのは間違っているということだ。

この話を聞いて私は納得できる場所が多く、あらためて日々の業務のあり方について考えるようになっていった。

高齢者介護の現場では「拘束」は禁止されており、利用者が拘束されるようなことは今現在はない。しかし、過去には間違いなくそのような時代はあったのだ。

私は、日々高齢者介護にたずさわる中で、嘘をつかない、ごまかさないということが大切ではないかと強く感じている。認知症でわからないから嘘をついてもいい、ごまかしてもいいと思っているならば大きな間違いだ。

それどころか、重大な人権侵害ではないだろうか。

先日、その話を同僚のスタッフにしたところ、「安心・安楽」を与えるために「言葉の偽薬」があってもよいのではという意見をもらった。

「安心・安楽」を与えるために「言葉の偽装」を使うのか、真実を伝えるのかは、その場の状況によるのではないだろうか。

少なくとも私たち介護スタッフ一人ひとりが真剣に高齢者と向き合っていく先にさらなる高齢者の人権尊重があるのではないか。

前述したようにかつて高齢者介護の現場では、認知症の人を「拘束」するのが当たり前だった。しかし、時代は移り、今現在は「拘束」が当たり前ではない時代が変わった。

同じように認知症高齢者の人に対して、嘘をついたりごまかしたりするのが当たり前の時代はいずれ変わっていくはずだ。このコロナ禍の中で介護業界も大きく変化している。私の考える未来もそんな先のことではない。

そんな思いが、私の中にふとよぎった。

## ■ 優秀賞

# コロナ禍の自立・就労支援

工藤孝之

---

新型コロナウイルス・パンデミックの影響で生活困窮に陥った市民が飛躍的に増えている。現在、私は湘南に位置する福祉事務所で生活困窮者に対する自立・就労支援に関わっているが、連日、多くの相談が寄せられる。「お金がなく食事が取れていない」、「家賃滞納からアパートの立ち退きを迫られている」、「仕事がなくなった」、「家族の間で争いが絶えない」、「体調が悪く医院で診てもらいたいがお金がない」切羽詰まって駆け込んで来るケースがほとんどだ。心が痛む毎日だが、使命感も掻き立ててくれるので、やる気が出るのも確かだ。

こうした生活困窮者に対してどう支援すべきか。福祉に関係する者として、私が強く意識していることだが、2つに区分して考えるようにしている。すなわち、当面の生活・福祉支援と、将来に向けた自立・就労支援だ。前者は、緊急食糧支援、住居確保、健康・医療面の一時対応が急務となる。後者には、生活費を稼ぐための就労支援や生活環境の改善、家庭内トラブル対処が求められる。福祉事務所だけでなく、社会福祉協議会・ハローワーク・病院・NPOなど、多くの機関・団体・事業所との連携が欠かせないが、いかに相談者に寄り添った支援をタイムリーに届けるか。それが重要だ。

ある日のこと。高齢の女性が生活困窮窓口に来られた。「コロナの影響で調理補助のバイトがなくなったの。貯金もほとんどない。すぐに働きたいけど70歳では無理かしら？」

当面の生活・福祉支援の聞き取りが済んだ後、就労支援員としての私の出番となった。確かに70歳という高齢を考えると、新たな就労は簡単ではない。求人票に年齢不問とあっても、多くは65歳位までの想定だ。ましてや70歳でも面接OKと応じる会社が果たしてどれだけ存在するだろうか。加えて、今はコロナ禍である。求人と求職のバランスが大きく崩れ、どんな職であれ、厳しい競争が待ち受けているのが実態だ。でも、あきらめるわけにはいかない。この相談者は自立を望んでいる。自立には就労が絶対条件だ。そうであるならば、たとえどんな困難が待ち構えていようが最善の努力をすべきだ。何としても就労させよう。妙に闘志が湧いた。

私はこれまでの経験から、自立・就労には目標設定がとても有効だと確信している。いつ頃までに、どんなやり方で、どんな自立を目指すか。これらを相談者と対話しながら、メモ用紙にキーワードを書き込んでいく。話しただけではすぐ忘れてしまう。その場でメモを作成し、渡すのが私の流儀でもある。高年齢なら尚更、作戦を立てて取り組むべきだ。早速、相談者に対して、3ヶ月以内の就労を目指し、求人票選び・ハローワークでの紹介状入手、応募書類の原稿から仕上げ、面接リハーサルまでスケジュールを描いた。

だが、予定通りには進まなかった。いくつかの希望に沿った求人票を検索し、いざ応募にこぎつけても、ほとんどが書類選考で落ちた。運よく面接まで進んでも選外となった。既に2ヶ月が過ぎていた。私は相談者と膝詰め面談を繰り返し、作戦を変えた。清掃職も含め、近場で、早朝からの勤務に絞った。これなら応募者も限定され、採用される可能性が高い、と踏んだ。難しい条件だったが、懸命に探したら格好の求人を見つけた。すぐに応募させ、応募書類のレベルアップと面接特訓に注力した。そして吉報が舞い込んだ。面

談開始から4カ月経過していたが、窓口に笑顔いっぱいの相談者がやって来た時は、思わず私も駆け寄った…。

「コロナ・パンデミックをどう考えるか？」と問われたら、私は「人類に与えられた試練だ」と答えたい。私たちは文明社会の便利さに慣れ過ぎてしまったのではないか。パンデミックのような未知の脅威に対してあまりにも無防備過ぎた。いや、真剣に考えることがなかった。地球市民としてどう向き合うのか、宿題を投げかけられた気がしてならない。試練だから、その解決策を見つけるのは容易なことではない。だが、一人一人が自分のことに置き換え、何をすべきかを真剣に考えれば必ず光明は見出せるはずだ。

私の担当している生活困窮者に対する自立・就労支援を考えると、関係者と情報の共有と分担に加え、相談者に対して目標をきちんと設定し、行動を起こすことで確実に就労にむすびつくことを学んで来た。これからも私の出番がある限り、スピード感と時代に合った創意・工夫で就労支援に当たるつもりだ。その先には相談者のあふれんばかりの笑顔が待っている。これ以上の喜びがあろうか。



## パンデミックと私たち

熊谷真弓

---

### 1. コロナ禍の中の福祉施設

2022年1月末現在、毎朝、今日は利用者も職員も変わりなく顔を合わせることができた、という安堵感を確認してから施設の1日が動いていきます。

私が勤務する婦人保護施設慈愛寮は、様々に困難な事情を抱えた産前産後の妊産婦とその新生児・乳児の生活支援をしている入所型施設です。定員20世帯、平均2～4か月ほどの滞在で、生活再建、養育支援を受け、地域生活に移行します。

2020年2月～3月、私たちにとって未知の世界の新型コロナウイルスの感染拡大。自粛要請の中で、緊急職員会議を開き感染対策を練りました。元来、感染対策はしっかり実施している自負はありましたが、さらに情報収集しつつ新たな予防対策、もし感染者が出た場合の想定される対応方法等、本当によく議論し、マニュアル作成をし、消毒、消毒の毎日を過ごしてきました。直接向き合って援助・支援する医療・介護・福祉の現場はほぼテレワークができません。どの現場も命がけでこの2年間生き抜いてきたと思います。

### 2. 感染対策が人と人との直接の交流を阻む中で

人は人との関係の中で生きていく存在だと福祉現場は考え、対人援助の支援力をつけていくことを大事にしています。新型コロナ感染症は、この大前提を覆さざるを得ない事態となりました。まずいのちを守るためのソーシャルディスタンス、マスクの着用、食堂では

無言で喫食の推奨、一人用の食卓テーブルへの切り替え、感染予防の亚克力板の設置、消毒・検温機器の導入、利用者生活の潤いのためのプログラムも、人数の縮小、外部講師プログラムは休止し、職員が新しいプログラムを工夫等等。嘱託医・弁護士はオンライン活用も実施しました。あらゆる方法を試行し、利用者が孤独にならないよう実践を積んでいきました。

### 3. 新たな工夫は日々の気づきから創っていく

慈愛寮は、一法人一施設の小さな施設です。交代勤務で24時間365日、利用者の生活を守っています。職員の連携こそが、施設支援の生命線です。一同に会することが月一度の職員会議しかない職場で、職員間の意思疎通の方法として、シンプルな方法ですが、「コロナ対策あれこれボード」を設置しました。職員室にホワイトボードを置き、コロナ対策について、気になる事、改善提案等を自由に書けるようにしました。毎朝の引継ぎで記入内容について話し合いをし、できる事は「決定事項」今日から実施、とし、皆の知恵を集めるようにしました。これは、とても有効な実践力をつける場となりました。消毒の方法から、利用者への呼びかけの仕方等について、支援職だけでなく、警備員、整備・美化チームまで多職種の日々の気づきを出し合ってきました。感染対策で購入すべきものについては、補助金申請も積極的に行いました。本当に毎日の、日々の気づきを大事に、拾い上げて、チーム慈愛としての新しい工夫を生み出す2年でした。これからもやり続けていきます。

### 4. いのちを守ること～事業継続という使命

とはいえ、利用者にとっては、ストレスのたまる日々です。ただでさえ、自分の意思だけでは切り開けない人生の困難を経験して、赤ちゃんを産み・育てるという状況は、とてつもない緊張や不安の

中での毎日です。慣れない施設生活への負担も最初は多いのです。それに加えてのコロナ禍です。

私たち職員は、そういう背景も受け止めつつ、それでも慈愛寮に来てよかった、と認めていただける支援をすることを最大の使命としています。従って慈愛寮では、外出の「禁止」等を指示することはありません。みなさんに、赤ちゃんとご自分、そして共にこの時期を施設で暮らす仲間のために、いのちを守ることを一番に考えましょう、一緒に生活を工夫していきましょう、とお話しし続けています。

#### 5. 豊かな福祉社会を創るために

まだまだ、続くコロナ禍です。お互いを思いやり、声を掛け合い、笑い合える日常生活を大事に、正しい情報を獲得する努力、知恵を出し合う職場のチーム力を核として、皆で考え、試行錯誤し、検証し、またトライしていく覚悟です。やはり、人は人とのふれあい、声をかわすこと、顔を見合わせることで、いたわり合う会話ができること、存在を感じあえることが生きる活力となります。抑鬱状態等、メンタルの不調時はまた別として、その場合は焦らずにそっと傍らに寄り添います。慈愛寮は短期間の入所施設ですが、退所後もつながりを持ち、ひとつの実家的居場所となるよう支援を継続しています。福祉の原点～相互の助け合い、お互い様、手を差し伸べられる人がまず動く、その中で公的責任として公共の福祉を創っていく、その循環が豊かな福祉「社会」を創っていく～慈愛寮は多職種連携のチーム力で、社会福祉法人の原点を大事に歩んでいきます。

# 一般の部

---

---

## ■最優秀賞

私たちの使命 …………… 小松崎有美

## ■優秀賞

障がいのある人との共生 …………… 安藤 信男

想像しよう …………… 感王寺美智子

心は「密」に…………… 後藤 里奈

## ■佳作

コロナ禍だから自慢したい …………… 大友 浩

「チャンとやる」…………… 古賀 裕一

「ウィズコロナの行方」…………… 小柳 義則

## ■奨励賞

幸せを心に ……………小原 マリナ

## 私たちの使命

小松崎有美

---

兄は元々音楽が好きでピアノに堪能な人だった。私がピアノに憧れたのも、小遣いで玩具のピアノを買ったのも、兄の影響だ。だがその兄は6歳の時に筋ジストロフィーと診断されると、その4年後には歩けなくなった。「幸せとは『何もないこと』だ」と実感したのもこの頃だった。兄の病気が発覚してから、家族は心の平穩を失った。筋ジストロフィーは身体の筋肉が徐々に固まってしまう病気で、現在も難病に指定されている。車椅子になった兄はちよくちよく「なんで俺をこんな身体に生んだんだよ」と母に暴言を吐いた。私にもコップや楽譜を投げつけた。自室の壁には無数の穴が開く。本当は家を飛び出したいくらいの衝動を、辛うじて動く指先に託すしかなかった。

そんな兄を介護しながら母も心のやり場を失っていた。何より周囲の理解を得られないことがキツかった。それも仕方ない。世間体ばかりを気にする田舎の集落だ。母の実家は「障がい者がいるなんて周りに言うな」と釘をさし、帰省もさせてもらえなかった。学校内もバリアフリーがまだ整っておらず、四六時中付き添いが必要。階段では兄をおぶい、男子トイレの中までもついて行く。そんな状況を白い目で見える生徒がどれだけ多かったことか。「かわいそう」と言われるのが一番頭に來たと母は言う。

兄が寝たきりになってから私たちは介護の一部をヘルパーさんをお願いした。食事の介助。排泄。タンの吸引。寝返りの補助。日に

日に身体機能が落ちていく中で、夜中でも鳴り響くブザーに対応しきれなくなった。

だがヘルパーさんが来てから兄が笑うようになった。元々吹奏楽をやっていたというヘルパーさんは兄が作った曲をピアノで演奏してくれた。実を言うと兄はほぼ寝たきりになってからパソコンで曲作りをしている。それまではインターネットで知り合った仲間と定期的に演奏会を開いていたが体力が限界を迎えた。だから曲作りは兄にとって残された音楽とのつながりとも言える。自動再生もクリックひとつで可能だ。しかしヘルパーさんの演奏を聴いた兄は「自動演奏とは全然ちがう」と感極まった。

以来ヘルパーさんが来るたび新曲を弾いてもらうようになった兄。曲調も以前よりハイテンポなものが多く、躍動感もある。何だか兄の心の中みたいだ。

「こんなにいい曲なんだからもっと多くの人に聴いてもらいたいね」

それは兄に関わるすべての者の願いだった。

そんな時偶然テレビで小児病棟のオンライン演奏会を知った。とある大学のボランティアサークルで普段はここで遊びや学習のサポートをしているという。世間はコロナ禍とあって訪問の機会は激減。それでも音楽で子ども達を元気にしたいとオンラインでのコンサートに踏み切った。私はここにヒントを得た。

早速近隣の小児病棟に問い合わせるとすぐに良い返事がもらえた。兄も曲の手直しをしながら歌詞もつけ始めた。

オンラインコンサートはヘルパーさんの伴奏に兄と私が歌うかたちで実現された。スラッとした十本の指が、鍵盤の隅から隅までを疾風のように駆け巡る。その動きを見るなり、スゴい！と子ども達が目を丸くした。そして私たちの歌が始まる。

(歌詞の一節より)

大丈夫？ひとりで泣かないで

大丈夫！ひとりじゃないよ

大丈夫？涙を拭いて

大丈夫！笑って過ごそう

遠く遠く離れていても

僕はあなたを思っているよ

泣いて泣いて苦しむよりも

笑って笑って生きようや

そう大丈夫　きっと大丈夫

ほら大丈夫　もう大丈夫

兄はベッドに寝たまま、ちいさなピンマイクをつけて歌った。すると鼻にチューブをつけた男の子が手拍子をし、車椅子の少女が楽しそうに横に揺れ始めた。中にはキーホルダーの鈴を鳴らす子どもまで。皆、皆、笑顔だった。兄の言葉が強いメッセージとなって子ども達に届いたことは間違いない。

「全然知らない曲なのに、なんか元気になっちゃった」

歌の感想を聞かれた少女ははにかんだ。その表情を見て、人の幸せは耳にした「音」や「言葉」にあるのかもしれないと思った。たとえ目が見えなくても、手足が動かなくても、耳から貰う幸せもあるような気がした。

「僕は手も足も動きません。でも皆さんの心を動かしたら、それ

が僕の幸せです」

兄は、最後、強く語った。その姿は決して「かわいそう」ではなく、むしろかっこよかった。ヘルパーさんは目頭を押さえ、私もピンマイクを外すふりをして泣いた。

まだまだ終わりの見えないコロナ禍。医療・福祉現場は面会自粛を求められ、孤独感や孤立感に苛まれる者もいる。それでも大丈夫だと今は思える。変わりゆく日々の中で笑顔に変わるきっかけはきっとある。それを追い求めてゆくことが共生社会にいる私たちの使命なのかもしれない。今年は「五輪イヤー」だ。私は兄に『これからも励ましま賞』を密かに贈った。



## ■ 優秀賞

# 障がいのある人との共生

安藤信男

私は71歳で初めて経験した新型コロナウイルスのパンデミックは、人間として最も大切に失いたくないものは何かを明確に確認させてくれた。それは人間同士の共生である。人間同士が交流を持ち理解し尊敬し感謝し合う共生である。

これは日々の小さな積み重ねにより確立する。パンデミックでない時は、日常のごく当たり前のように人間同士の関わりは可能であり、共生できやすいが、いざパンデミックになると、日常的な交流自体が遮断され、人間同士が共生を感じることは非常に困難になる。これは非常に不幸なことで、パンデミックが解消されない限り解決はない。

私と妻は、障がいのある人との共生において今回のパンデミックの恐ろしさを体験し、早くそこから抜け出したいと考えたが、簡単なことではなかった。

まず、私たち夫婦と障がいのある人たちで築き上げた共生について紹介する。

私と妻がパンデミックによって遮断された共生は、令和2年、知的障がい者支援施設の創作クラブにおける支援者(ボランティア)である私たちと創作クラブで活動する知的に障がいのある人たちとの共生である。

パンデミックが発生する前の9年間、毎年4月から10月までの週1日、障がいのある人たちは、さまざまな絵画活動を通して、そ

それぞれの持ち味を生かし作品を集中して描き、完成の喜びを味わっていた。そのことに共感する私たちも制作した部員も共生の感動を確かめ合い続けていた。さらに、その絵を廊下に掲示することで、部員と他の仲間や職員との交流を深め、やがて互いに理解し尊敬し感謝し合う共生の輪を広げる努力も繰り返していた。これもパンデミックによって新しい作品が制作できず遮断された。障がいのある人たちの感染防止のため、外部の人は施設に出入りすることが禁止されたのである。私たちも施設へ入ることができなくなり創作クラブは休止した。

これまで9年間、小さな毎日の積み重ねで築かれた共生の営みが中断された。

私たちは家庭で共生の喜びを思い出し、パンデミックが一日も早く解消されることを祈るしかなかった。もし、私たちがパンデミックが解消され、クラブを再開したとき培われていた共生に戻ることができるか不安な気持ちも持っていた。いや、そんなに簡単に培われた共生は崩れないと信じ、妻と私は励まし合った。そうでなければ、私たちと障がいのある人の共生は本物でなかったことになる。

非常に嬉しいことに、令和3年4月、創作クラブは十分な感染防止に努めることを条件に施設の許しで再開されることになった。

令和3年4月、最初の創作クラブの活動日がやって来た。私たちは再開の喜びで興奮気味だった。1時間前に活動室に入ったが、すぐに2、3人の部員も待ちきれなかったように入室した。自発的に机に新聞紙を敷き活動の準備を始めた。いつも開始ぎりぎりに入室するSさんも早めに入室し、今まで聞いたことのない元気で明瞭な言葉で挨拶をした。それだけではない、私たちに「休み中何していたの」と質問をした。それぞれが1年ぶりの活動を楽しみに待っ

ていたことを感じさせる表現をした。私たちはこれが嬉しかった。

最初の活動は、壁いっぱいの土偶の写真から好きなものを選び写生することである。描く土偶はすぐに決まった。写生の合図の前に描き始めた部員も2、3人いた。全員が集中して、自分の持ち味を加えた土偶を完成させた。どれもが素朴で味があった。製作途中で「お母さん」と妻のことを呼び、作品を認められたい意思表示をした部員が今日は多かった。この人たちは、このことで1年間確かめられなかった共生を確認しているのだと感じた。妻は、その人の作品をほめた。

このような気持ちの部員に予期せぬ嬉しい知らせが飛び込んできた。全員が描いた土偶を1枚の大きな紙で組み合わせた共同制作をしている時のことである。令和元年に共同制作した貼り絵「秋・ほくほくやきいも食べたいな」が、第6期北海道障がい福祉計画（令和3年度～令和5年度）の表紙になったのである。この作品は令和元年度北海道知的障がい者芸術祭でみんなアート大賞を受賞した作品であった。令和2年は芸術祭は中止だった。

令和2年は、パンデミックで共生の歩みが中断していたが、このような形で認められ、創作クラブの私たちの共生の絆はより強固になった。

## ■ 優秀賞

# 想像しよう

感王寺美智子

---

2021年。約束の春が来ようとしていた。

待ちわびた再会の春になるはずだった。

「しかたねえ。年寄りが多いっけな。残念だが延期にするべ」

電話の向こうで、自治会長さんが、ため息をつく。

私は、東日本大震災の後、気仙沼の中学校のグラウンドに建つ仮設住宅で暮らしていた。その時、自治会長さんは、言った。

「仮設住宅暮らしっていうと、辛いでしょとか、しんどいでしょとかばっか、言われるべ。けんど、おら達は違う。皆で一緒に、いろんなことして、楽しい思い出さ、いっぺえ作るべ。花さ植えたり、歌さ歌ったりしてさ。ほんで、震災から十年後、また、ここさ集まるべ。集まって、あん時は楽しかったな、おもしろかったなって、皆で思い出話すっべ」

仮設住宅を出た後、九州へ引越した私は、その日を心待ちにしていた。今年が、その約束の十年目。しかし、収まらないコロナ禍。

再会は叶わなくなった。

私は、被災者ではない。震災後、復興支援職員となった夫と、気仙沼の仮設住宅に移り住んだ。私も何かせねばと、福祉施設やボランティア団体をまわった。だが、無力だった。何の資格も技術も持たない、おまけに乳癌の治療が続いており、体力もない。情けなかった。私は何をしにここへ来たのか……。自分を責め、狭い部屋の中で引きこもった。外では、井戸端会議をする住民たちの賑やかな声

が聞こえるが、申し訳なくて出ていけない。そんな私の部屋の前に、毎日のように、野菜やら何やらが、置かれていた。礼を言いたいが、誰だかわからない。ある日、思い切って、井戸端会議のベンチへ行った。

「あの……」

話が止まり、皆が、いっせいに私を見た。「お、トーチャーの人、大根、一緒に掘るべ」、いきなりスコアボードの裏へ連れて行かれた。そこには小さな畑があった。

「おら達は、何もかも流されたっただけんど、んだは、また皆で、こうして土さ耕して、育てればいいちゃ。アンタも手伝ってけれ」

恐る恐る、土に触れると、大きなミミズがニョロリ。私はギャーッと、校舎まで響くような叫び声を上げてしまった。

「ミミズもな、いい土さ作って、手伝うってくれてるだ。何もしてねえ訳じゃねえぞ。生きもんは皆、生きてるだけで、支え合ってるだ。」

励ましに来た私が、逆に励まされていた。

……私は、この土のミミズになろう……

それから私は、被災者の皆さんと、毎日の暮らしを、共にした。共に花を植え、野菜を育てた。共に歌い、共に笑い、時には共に泣いた。特別なことは何もできないが、共にあること、それが私の復興支援活動となった。

「ずっと気仙沼におれ。おらんとこ畑やれ」

そんなことを、言ってくれる皆さん。ずっとここで暮らしたいと、思い始めていた。

しかし、熊本地震がおきた。

行って、ここでの経験を活かすべきだ。でも、気仙沼を離れたく

ない……躊躇う背中を押したのも、気仙沼の人達だった。

「人によろするんは、自分の為じゃねえ。アンタの母ちゃんによろしてもろた、アンタの故郷の人によろしてもろた、知らん誰かによろしてもろた。そうやって、よろしてもろた感謝を繋げていぐ為だ。おら達は、日本中の人達によろしてもろた。感ちゃん、おら達によろしてもろたを、熊本さ持っててけろ。大丈夫だ。気仙沼は何処へも行かねえ。十年後、また会うべ。皆、待ってっから」

それから私は、熊本の阿蘇へ、そして九州北部豪雨後、福岡県朝倉市へと、気仙沼で預かった“よろしてもろた”を繋いできた。十年目の再会を励みにして……。

しかしコロナは、終息の兆しを見せぬままに、約束の十年目は過ぎていく。

七月、電話が鳴った。

「もすもす、また豪雨だっとな、大丈夫か？」

「何かいるものあるか？」

気仙沼の人達からだ。切ってはまた、切ってはまた鳴る。

「大丈夫、大丈夫だから」

電話の向こうの、心配そうな顔が、ひとりひとり浮かぶ。そして、その後ろに、あの仮設住宅のグラウンドが浮かんた。

そうだ。想像するんだ。どんなに遠く離れていても、人を思う心は、遠くはならない。

気仙沼の空は今、何色だろうか？

寒くはないだろうか？

会えなくとも、その人が、今、どんな空の下で、どんな風に吹かれ、どんなふうで、どんな気持ちで、生きているか、想像するんだ。

互いに、相手の立場を想像し合えば、思いやりが生まれる。想像

し合えば、離れていても、何ができるか、考えられるはず。

私達は皆、同じ空の下にいる。

人を思いやる心は、繋がっている。

## 心は「密」に

後藤里奈

---

「コロナ」という言葉を耳にするのも嫌気がさしてくる昨今、感染拡大による弊害は様々な場面で見られたが、同時に新たな発見や普段は当たり前だと思っていたことに対する感謝が生まれた良いきっかけにもなった。特に、家族や友人など周りの人々、地域や社会との「つながり」の大切さやありがたさに気づいた人は多いだろう。

また、医療従事者をはじめとして、その他様々な職業に就く方々の存在の大きさも改めて実感することも多かった。制約のあるなか、感染対策に配慮したうえでどのように社会生活を維持し交流を図っていくか考えることは、今後も課題となりそうだ。それは福祉社会においても同じことが言えるのだと思う。

岐阜県に住む私の祖母は、祖父に先立たれてから一人暮らし生活となったが、高齢で足腰も悪いため、一人で家事をこなすのは大変なようだった。近所のデイサービスには週に数回通っていたが、だんだんと足が向かなくなってしまった。また、以前は毎日のように台所に立ち、何種類ものおかずを作っていたが、祖父がいなくなってからは料理もしなくなり、食も細くなって、コンビニのおにぎりなど簡単なもので食事を済ませることが多くなってしまった。そこへ新型コロナウイルスの感染拡大、外出自粛により、外へ出る機会はずっと減っていった。そんな祖母を心配し、離れて暮らしていた私たち家族は頻繁に祖母を訪ねて様子を見に行き、おかずを持っ



て行ったり、電話で安否を確認したりしていた。そして、栄養の偏りがちな祖母のために仕出し弁当の配達を頼むことにした。そのお弁当は、地元のボランティアの人々が毎日手作りしているもので、出来合いのものとは違って温かみがあり、健康面も安心である。だが感染対策のため、自分達で手作りすることができなくなってしまった。そこで町の飲食店に製造を依頼し、配達のみを行うことにしたそうだ。近隣地域では、祖母のように一人で暮らす高齢者は多いが、外出も困難になると、一日中誰とも話さずに過ごす日も増えてしまう。近所の人々が直接配達することで、短時間でも会話が生まれ、地域とのつながりを実感できる。

ある時、母が祖母の家へ行った際、いつもは気丈に振る舞っていた祖母が布団にうずくまり「寂しい」と言って泣いていたと聞かされ、いたたまれない気持ちになった。祖父を亡くし、ただでさえ孤独を感じていたうえコロナによって誰にも言えない不安をさらに募らせていったのだと思う。家族でありながら、そんな祖母の気持ちに気づけなかった自分を責めたくもなった。けれども、お弁当を配達してくれる近所の人との他愛のない会話が、祖母の心を軽くしてくれたのだ。

またある時は、祖母のもとへ一通のメッセージカードが届けられた。これは地元の小中学生が一枚一枚手書きで書いたものだ。かわいらしいイラストとともに「いつまでもお元気で、お体を大切にしてください。」と書かれており、喜ぶ祖母の姿に、私も晴れやかな気分になった。たった一枚の葉書、一言の言葉でも、人はこんなにも温かい気持ちになるものなのだ。直接会えなくても、心の通い合うコミュニケーションは可能だと教えてくれる良い経験となった。

この他にも、岐阜県では手作りマスクの配布や、オンライン・訪

問型の地域交流などを行い、独居高齢者が孤独を感じ、心身ともに弱っていくことがないように、サポートを行っている。正しい情報を共有することで、地域ぐるみで感染を防ぐこともできる。家族や医療・福祉関係者だけでは大変な介護も、地域の目が入ることで負担軽減にもなるのだろう。

特に趣味のない祖母にとっては、近隣の人々との会話や子供との手紙のやり取りが毎日の楽しみとなり、不安や寂しさを感じることも少なくなったようだ。困った時に声をかけ、手を差し伸べてくれる人、日常的に見守ってくれる人の存在が何より大切なのだと気づかされた。

コロナによって浮き彫りになったのは、高齢者をめぐる問題だけではない。あらゆるマイノリティーに属する人々や弱い立場にある人々の社会的孤立、生活困窮の拡大など、喫緊の課題はまだ残されている。解決の糸口は人と人とのつながり、支え合い以外にないのだと思う。

先行きの見えない社会情勢ではあるが、このような時だからこそ身近な人々との心は「密」に、距離を縮めていくべきなのだろう。

## コロナ禍だから自慢したい

大友 浩

---

自慢したいと思う。私自身ではない。私が成したことでもない。私をその道に導いてくれた彼らである。私が支援学校の教員になったのは30才を過ぎてからである。かなり不埒な若者だった私が、やっと立ち直ろうと思ったのは20代後半だった。償いのつもりで働いた。その先に支援学校の教員という仕事があった。中でも担当する者のいない、重度障がい者の大学進学という未開の地に導かれた。それまで障がい者に縁の無かった私は、学校の中で「よそ者」のような思いで働いた。平教員のまま30年ほど働いて、進路指導部で定年退職を迎えた。

或る年、難病のためにベッド上の生活が全ての高校生Aに出会った。学力が高いにも関わらず、Aに高等教育の門は堅く閉ざされていた。若い私はその不条理に悩んで、ふと思いついて放送大学本部に連絡をとった。「よそ者」でなければ思いつかなかったと思う。教員たちの不興や管理職の反対もあったが、「生涯学習政策」の時代背景が後押しした。一年後には試験監督を派遣してもらい、病床で単位認定試験を受けられる仕組みが出来上がった。前例のないことだった。

また或る年には、筋ジストロフィー症で指先しか動かせない高校生Kに出会った。成績がいいだけの子ではなかった。アクセシブルデザインで社会に貢献したいという高い志に心を打たれた。大学入試センターとの直接交渉を始めた。「障がい者差別解消法」の施行

に後押しされて、一年半後にはパソコンとペンタブレットを使って入試センター試験を受ける仕組みが出来上がった。これも前例のないことだった。その後も彼は志を貫いて、昨年大学院に進学した。コロナ禍で面会ができずに苦しんでいる患者や家族のために、新しいVR技術の開発に取り組んでいる。

また、Sという重い心臓機能障がい生徒がいた。手術と入院を繰り返し、小学校は欠席することが多かったらしい。支援学校の高等部に入學してきた時には、話しぶりは幼かったが学習意欲はとても高かった。彼女は療育手帳を持っていた。これは知能検査の結果が基準値以下の者に交付される。欠席の多かったSには当然の検査結果とも言える。母親が娘の将来を案じて申請したものだったが、これがSのステイグマになった。普通教科を学ぶことを希望し続けたが、療育手帳を所持しているために中学校でも支援学校の高等部でも許可されなかった。そんな彼女が大学進学を希望したから騒ぎになった。管理職もはじめ反対する教員が多かった。「進学しても先が見えない。将来を考えて就職した方がいい。」進路指導部の私に対応が任された。

「この子は私より長生きすることはないので、望みを叶えてほしい。お願いします。」母親の切実な言葉に、「よそ者」がまた不興を買う動きを始めた。大学との交渉が始まった。教科学習を拒否され続けたSだったが、大学に合格して3年後には栄養士資格を得た。担当教授によれば、大学時代の成績は前例のないほど素晴らしいものだったらしい。大学受験とその後の通学は、「障がい者差別解消法」施行に後押しされたもので、大学の前例のない配慮に支えられた。卒業後は母校の支援学校に勤務して給食室の運営に貢献した。コロナ禍の難しい対応に尽力していたが、2年目の年末に突然の心

臓発作で夭逝した。斎場に飾られた丁寧なイラスト入りのレシピ集が、彼女の生きざまと志を物語っていた。

私は退職後も一般人として、相談や支援を続けている。あの頃、生涯学習政策の時流に乗って放送大学の病院での修学は実現した。また、「障がい者差別解消法」に後押しされて重度障がい者の大学進学を進めることができた。けれども昨今、自治体や大学で異口同音に聞かれることがある。「こんなコロナ禍の状況なので・・・」。中には、「重度障がい者を受け入れなければ、何十人もの貧困家庭の学生に分配できる。」と語る大学の学生支援担当者もいる。時代は常に弱い者から切り捨てる。かつて「戦時下だから」「災害後だから」「非常時だから」「不景気だから」と、あまたの弱者が見捨てられ、虐げられてきた。“おもてなし”が、世界に誇れる日本人の美德らしいが、歴史的にはスティグマや因習に捕らわれやすい国民とも見える。

今だからこそ自慢したいと思う。件の重度障がいの若者たちは、コロナ禍の学校給食や、入院患者の面会に資するという、目に見える貢献力を持っているだけではない。教員である私に、人が学び続ける意味と、あるべき社会を教えてくれた。私は62才になる今、博士課程に進学して次世代育成に微力を注ぎたいと考えるようになった。問われなければならないのは、重度障がい者の生産性ではない。コロナ禍だからこそ問われるべきは、生産性それ自体である。この好機を、日本社会は逃してはならない。

## ■ 佳作

# 「チャンとやる」

古賀 裕一

---

コロナ感染状況が少し好転したように見えたこの正月、東京に住む長女一家が二年ぶりに安城の我が家に帰省した。密になるだろう新幹線を避けて車での移動である。しかも東京から四時間半、サービスエリアでの密も避けて止まらずに旦那が運転してきたようだ。

我が家でゆっくりしていたが四人の子供が外で遊びたがり、バスケットができる小さな公園に車で出かけた。先に遊んでいる若者がいたが、長女の車の品川ナンバーを見たのか、我々が入っていくと、迷惑そうに直ぐにどこかに去って行った。その様子を見た高校生の孫娘が言う。

「東京から来たのを怖がられているのかもね。パパもママもワクチン打っているし私たちも PCR 検査で陰性なのにね」

私は十年前の福島原発事故を思い出す。被災地から避難してきた福島ナンバーの車に対する非情な扱いがニュースで取り上げられていた。差別、分断を感じる悲しい現実だった。

科学的にどうであれ、風評による差別は依然存在する。少しでも危険を避けたいと思う気持ちは分からないことはないが、そこに品性が感じられない。優しさが無い。

同じようにこの二年に及ぶコロナ騒動で世の中の分断を感じる。

病院でコロナ患者を救っている医療従事者の子供たちが学校や保育所で冷たい待遇を受けている、といった話を聞くと、呆れると同時に悲しくなる。本来は感謝されるべき人たちだ。恐らく彼らの家

族内での感染対策は専門家だけに我々のそれと比べても厳しいものだと推察できる。それを想像できずにただ危なそうだから排除するという考えはあまりに短絡的であろう。コロナ怖さに心が荒んでしまった人々が居るのだ。

一方でファストドクターと呼ばれる往診救急医療を行ってくれる医師が存在する。一人で不安な自宅療養者を診てくれると聞く。頭が下がる思いだ。同時に身を粉にして業務を遂行する医療従事者やエッセンシャルワーカーへの感謝の行動を起こしている人が沢山居るのも事実だ。

先日、マスクを忘れたらしき年配の女性がスーパーの前でオロオロしているのを見かけた私の妻が予備のマスクを差し出してあげたそうだ。

「とても喜んでくれたのよ。予備を持っていて良かった」と嬉しそうに話してくれる妻を私は誇らしく思う。

コロナ禍の現在に於いての豊かな福祉社会を考えると、こういった寛容、感謝の気持ちを忘れてはならないだろう。

私の住む安城の田園地帯では川沿いや畑に囲まれた農道を散歩する人が増えた。コロナ禍で運動不足を解消するためと思われる。

私と妻も愛犬テツを連れて毎日歩いているが、残念なことに散歩道両側の畑にペットボトルや紙くずが落ちているのを見かける。「ごみを捨てるな」と書かれた看板が虚しい。

犬友達のマルちゃんのおじさんは毎日の散歩の時に大きなゴミ袋持参し、畑に捨てられたボトルや紙くずを片付けてくれている。彼の行動にも頭が下がる。

ある時、川の中に大きなゴミ袋がいくつか捨てられているのをいつも二人で散歩している年配のおばさまたちが橋の上から見つけて

話しかけてきた。

「困ったものね。この川の景色は私たちの心のオアシスなのにね」

高齢者の我々にとっては川に降りるのは結構な重労働だがこの言葉は捨て置けない。

「うちは近くなので片付けておきますよ」と言って私と妻は家に戻ると長靴に履き替えて思い切って川に降りて行く。浅い川だが川底が滑り易い。なんとか転ばずにゴミ袋を拾い集めることが出来た。

暫く経った別の日、同じように川に捨てられたゴミ袋を今度は同じおばさまたちが二人で片付けようとしているのを見かけた。慌てて私たちも手伝う。

「今日は私たちも長靴を用意してきたのよ。久々に川遊びをしているみたいで結構楽しいわね。でも、明日は筋肉痛ね」と四人で笑い合う。

マルちゃんおじさんの行動が我々にも自然に引き継がれた感じがして嬉しく思う。

私たち老夫婦にできることは限られている。それでもちょっとしたことをちゃんとやる、という姿勢が豊かな福祉社会に繋がりそうだ。

コロナに対しても同じことが言えると思う。

手を洗う、うがいをする、マスクをする、三密を避ける、といったことをみんながちゃんとやれば感染の広がりはかなり抑えられるはずだ。そうした上で、事情があって困っている人たちには手を差し伸べる優しさが必要だろう。

強力なコロナウイルスと言えども人の心には感染しないのだから、パンデミックが起きているからと言って不安のあまりに俯く必要はないのだ。



## ■ 佳作

# 「ウィズコロナの行方」

小柳義則

---

今年4月で63歳になる。

これまでの短くはない人生を振り返ってみると、後半に大きな災難が集中していたように思う。それは私自身を襲ったというより、日本中を巻き込んだ災難であった。

1995年の阪神淡路大震災。

2011年の東日本大震災。

そして現在、ここ2年余り世界を覆い尽くしているコロナ禍である。

自分が生きている間にこんなことが起きるなんて……。

大きな災禍に見舞われる度に、そう思ったものである。いま思い出しても、そのときの光景がすぐに浮かんでくる。

阪神淡路大震災のときの、断裂した高速道路に落ちかかっているバス。街中が火の海になっている映像。倒壊した家々。

東日本大震災のときの、街並みが津波に呑み込まれていく姿。原子力発電所から吹き出ている白煙。

瞼の裏に深く刻まれている。

だが、今回の災いは様相が違う。見えないのだ。見えない災禍が、人々を蝕んでいる。新型コロナウイルスは、人間の身体だけではなく、心まで冒しているように私には思える。

人は災難に遭ったとき、いかにして乗り越え、立ち直っていくのだろう。

傷つき、哀しみの底に沈んだ者に手を差し伸べて、優しく寄り添ってくれるのは、やはり人ではないだろうか。助けて、助けられて、人々は生きている。災害で苦難に陥ったときには、特に強く感じる。阪神淡路大震災のときも、東日本大震災のときも、そのことを改めて認識させられたものだ。

さて、転じて現状のコロナ禍はどうだろう。

目には見えないウイルスの感染拡大とともに、人々の中に疑心暗鬼と相互不信が広がっているように私の目には映る。豊かな福祉社会から、どんどん遠ざかっているように思える。いまこそ、福祉の大切さを再認識しなければならないのではないだろうか。

福祉――。

新聞やテレビなどで聞かない日はないくらい耳慣れた言葉である。ただ、よく聞く言葉だけに漠然としたイメージのみで、理解したような気になっていた。だけど、よくよく考えてみると、『福祉』の本来の意味とは何だろう。

広辞苑には、こう書かれている。

『幸福。公的扶助やサービスによる生活の安定、充足』

そうか。福祉とは、幸福と同義語だったんだ。これはちょっとした驚きであった。

私の中で福祉とは、何かを施すという印象があった。なにやら上から目線で、自分の不明と無知、不見識に恥じ入るばかりである。

誰だって、幸せになりたいと思っているはずだ。自分なりの幸福を求めて、日々生きている。しかし、大小さまざまな障害がそれを邪魔する。想定を超えた自然災害、予想もできなかったパンデミックなどは、その最たるものである。それらの災禍の前で人間というのは非力だどつくづく感じる。

だが、非力ではあっても、無力ではない。人と人が思いを同じくして力を合わせれば、必ずや苦難を乗り越えられると私は信じている。

公助、共助、自助。よく言われている扶助の種類である。この中で公助、自助には、やはり限界がある。共助こそが、豊かな福祉社会を築く原点ではないか、と私は考えている。

お互いさま。日本には美しい言葉がある。苦しさ、辛さは慰め合い、喜び、笑顔は分かち合う。他人の身に起きたことは、自身にも起こり得ると捉え、互いに助け合う。これからの社会に求められるのは、そのような福祉の精神に違いない。

未来のことは浅識の私にはよくわからないが、コロナウイルスが絶滅し、二度と発生しないということはありえないだろう。ゼロコロナの時代が訪れるというのは、現状を見る限り信じがたい。

好むと好まざるにかかわらず、人々はウィズコロナの時代を生きていかなければなるまい。

ウィズコロナは、おそらく弱者と強者をさらに際立たせていくだろう。だが、恐れることはない。怯むこともない。

人間には、互いを労り合い、助け合う智慧と心根が備わっている。共に生き、共に助け合うことでコロナとの共存も可能になるし、また、そうしなければウィズコロナを乗り切るとは難しいだろう。

私たちはいま、試されているのだと思う。福祉の原点に立ち返り、皆が協力し合ってこの難局を克服すれば、きっと幸福が待っているに違いない。そう信じて福祉社会の一員としての役割を担っていききたい。

## ■ 奨励賞

# 幸せを心に

小原 マリナ

---

私はいそいでいます。

いつもいそいでいます。

自分に問いかける“何故そんなにいそいでいるの？”

私には以前、私の帰りを待っている大事な人がいました。

進行性の病気を持って、治らないと分かっている、一生懸命リハビリを頑張っていました。

家に帰ると“おかえり”と聞こえると私はホッとします。“生きていてありがとう”とかんしゃします。

3年半前まではこれが日常あたりまえでした。それでも私は今もまだいそいでいる。待ってくれる人はもういないと分かっている、家に帰りたいと足をいそがせます。

心の中に大きな穴があいてしまいました。前に進むために何かしないといけないと自分をおいつめる毎日が続きました。

家族はブラジルへ戻っておいでと言うけれど帰っても仕事があるかとかいろんな不安でなかなか決めることができず、悩んでいました。その時でした、コロナが世界中を脅かすことになりました。ロックダウンとか緊急事態宣言とか出されてちょっと安心している自分がいました。

“今はいそがなくていい、決めなくてもいい、休めばいい”と何からも逃げるようになりました。

ブラジルは世界でもっともコロナの被害を受けていた国です。

家族、友達のことがすごく心配でしたが、帰れない。連絡はSNSのおかげで遠ざかっていた家族との絆は深まりました。良い事、でも心配は続きます。近くても遠くても人を思う気持ちはみんな同じです。時々思うのは、もし主人が生きていたら、私が家にウイルスを持ち込んだり、濃厚接触者になったら、考えるだけで恐ろしいことです。

主人はこんな時代が来ると知っていて、心配をかけたくないためにさようならしたのでは？ 私はいまだに何も決めていない、でも気がつくといろんな事に挑戦して、今まで生きた分をこのパンデミックの中で許される範囲で全部出したいと思います。

一番の楽しい思い出は、なんとなく申し込んだ“オリンピックボランティア”。2018 パンデミックの中、やるべきではないとまよいながら研修を続けて、今は、やって良かったと思います。いつかみんなが“TOKYO 2020”が誇りに思える日がくるといいと願います。テレビニュースを見ていると、悲しい出来事が多くて、“コロナのせい？”“もしかしたら私はすごく幸せな環境にいて、幸せすぎて見えなかつただけかもと思う。

このパンデミックの中、深まる絆、こわれる絆……。マスク無し  
の笑顔はいつになったらまた見られるのでしょうかね。

たまに「先生、マスク外して」と言われることがあります。私も“どうして”と思うけど、もしかしたら今の子どもたちは、大人はみんな目じかかないと思っているのではないかと心配します。

ウイルスとの闘いは今から始まったことではない。昔からこれからも私達の生活を脅かして、変化しながら生き続けるでしょう。

私達にできることは何だ？

あたりまえだけど、幸せに暮らすことです。

一番の免疫は幸せだと思います。自分にもまわりにも良いことをする、してあげる。

今は会いたい人に会えないのは辛いけれど、生きてるとまた会える。生きてると何でもできる。

いそがなくてもいいよ！

## あ と が き

2021年度第23回「豊かな福祉社会を創るために」エッセイの受賞作品集をお届けします。

このエッセイ集には受賞作品が掲載されていますが、受賞ならなかった作品群の中にも心に残るものが多数あります。

今回のタイトルは「福祉社会」や「パンデミック」という言葉がメインとなっています。パンデミックはあくまでも感染症の世界的な拡大というだけの意味でしかありませんが、その世界で生きている人々の幸せについてストーリーを展開してもらえれば、という意図でした。そしてまさしく応募者の皆様はそれぞれ独自の視点から様々な気付きを表現してくださいました。

特に記憶に残った言葉を、断片的ですがご紹介させていただきます。

「パンデミック下では、人々が健やかで文化的な生活を保障された社会という意味での福祉社会とは言い切れない。」

社会科学的な視点での受け取り方。

「全国津々浦々、お手紙友達大作戦」

自分にできることはないだろうか、という発想がグンと飛躍した楽しい想像。

「つらい経験を受け入れることは苦しい。しかしそれは敗北ではなく成長であり大切な強さである。自分が苦しかった経験を拒絶するのではない。」

つらさを乗り越えたところの境地と、それらの経験をしっかり受け止めることの大切さを知ったときの言葉。

「本来尊重しあうというのは妥協点を見つけて許容しあうことではない。」

尊重しあう事と妥協との違いを発見した！

「障害者にとって最もうれしいのは、制度の拡充ではなく多くの人が理解を示してくれること。」

自らの視点でまっすぐな気持ちを表現したそのまま。

「私が知らないということであくさんの人が傷ついているのだと思います。」

純粋な感性を持つ高校生の想像力の豊かさが心を打ちます。

「変な言い方になりますが、私たちが今便利な世の中に住んでいられるのはペストのおかげというわけです。」

ペストの流行によってヨーロッパの封建制度が崩落したことからの言葉。世界的な悲劇にはその次にそれをもってどのような世界に変えてゆくのか、という大きな視点での気づき。

「回り道を拒否してその結果、道路工事が出来ずに中止になってしまったら、一番損をして困ることになるのは回り道をしなかった人たちだ。他人のためは自分のためでもある。」

人のために少し我慢をすることが結局自分にとってもメリットとなることをわかりやすくたとえ話で。

「『ミミズもなあ、いい土さ作って手伝ってくれてるだ。何もしてねえわけじゃねえぞ。生きもんは皆、生きてるだけで支えあってるだ。』励ましに来た私が逆に励まされていた。

・・・私はこの土のミミズになろう・・・」

復興支援しなきゃと肩ひじを張っていたのにミミズを見て悲鳴を上げてしまった自分。

「特別なことは何もできないが、共にあること、それが私の復興支援活動となった。」

地に足を付けることを学んだ経験。

社会を大きくつかんだ作風もあれば、日常の一場面をしっかりと見つけて大寫しにする作風もありました。それぞれ読みごたえがある作品群でした。

次回にもぜひご応募ください。

東京YMC A医療福祉専門学校  
相談役 八尾 勝



# 豊かな福祉社会を創るために

第23回

愛恵エッセイ募集



## パンデミック(感染症)と私たち

豊かな福祉社会を創るためにあなたの考えや思いを聞かせてください

### 応募方法

- 応募締切** 2022年1月31日(月) 必着
- 対象**
  - 1) 学生の部 在学中の方ならどなたでも。
  - 2) 専門職の部 福祉関係の仕事に従事している方。
  - 3) 一般の部 福祉に関する経験や分野は問いません。

※外国籍の方からの応募もお待ちしております。  
(ただし、日本語にかぎります。)
- 字数** 1,600～2,000字
- 体裁**
  - 1) 手書きの場合… 400字詰めA4横書き原稿用紙を使用し、読みやすい字で濃く書いて下さい。
  - 2) PC使用の場合… A4横書きで1ページを30字×26行に設定して下さい。
- 表紙**
  - 1) 裏面の応募用紙に必要事項を記入の上、作品の表紙として添付して下さい。  
(PC使用の場合、同様の内容を記載したもので可)
- 提出方法**
  - 1) 郵送… 右記宛先へ郵送して下さい。
  - 2) メール… 右記メールアドレスにご送付下さい。  
メールのタイトルに「エッセイ応募」と必ず明記し、原稿はワード形式で、表紙はPDFかメール本文に記入してご送付下さい。
- その他** 応募は、一人1作品、自未受賞の作品に限ります。  
応募作品の返却はいたしません。  
お預かりした個人情報は本目的以外には使用しません。

### 賞

- 最優秀賞 各部1点…… 賞状と副賞(5万円)  
優秀賞 各部3点…… 賞状と副賞(2万円)  
佳作 若干名…… 賞状と副賞(1万円)

※受賞者は愛恵福祉支援財団のホームページにて発表します。  
(3月下旬予定)

※受賞者の作品は「2021年度エッセイ集」に掲載されます。  
(事務局にて表記上の修正をする場合があります。)

※後日、表彰式を予定しています。  
表彰式については、応募された方に別途ご案内いたします。

主催:公益財団法人 愛恵福祉支援財団

共催:公益財団法人 東京YMCA

### 問合せ・応募送付先

東京YMCA会員部内「エッセイ募集係」

〒169-0051 新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

E-Mail: kaiin@tokyoymca.org

TEL:03-6278-9071 FAX:03-6278-9072

---

“豊かな福祉社会を創るために”

ーパンデミックと私たちー

ー 2021 年度 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 ー

---

2022 年 3 月 4 日 第 1 刷 発行

主 催 公益財団法人 愛恵福祉支援財団  
共 催 公益財団法人 東京 YMCA  
発 行 者 公益財団法人 愛恵福祉支援財団  
〒 114-0015 東京都北区中里 2 - 6 - 1  
TEL 03-5961-9711 FAX 03-5961-9712  
印 刷 アーク印刷株式会社  
〒 114-0024 東京都北区西ヶ原 3 - 66 - 9  
TEL 03-3915-4240 FAX 03-3915-4212

---

非 売 品



